

『南京の基督』から見る 芥川龍之介の近代観

于 天禱

芥川龍之介は日本の新思潮派を代表する作家である。彼の生きた時代はちょうど西洋文明が勢いよく日本に入り込んだ激動の時代であった。このような時代の中、芥川は何を考えていたか、どのような近代観を持っていたのであろうか。それを浮上させるにあたり、芥川の初期の近代観を色濃く反映する作品として、『南京の基督』を挙げることができる。

『南京の基督』は『中央公論』[大正九年（1920）七月]が初出であり、後に『夜来の花』（新潮社 大正十年（1921）三月）に所収された。これについての評論は少なくないが、否定的なものが多い。

笹淵友一氏は「明らかにキリストの信仰や信徒を嘲る意図をもった作品」、「キリストの信仰をお伽話として批評したもの」、「旅行者の感想」であると語っている。⁽¹⁾ 駒尺喜美氏も「キリシタンを殉教や信仰の美学からひき降ろし」たものと評している。⁽²⁾

これらの説は作品の一面を突いてはいるが、納得しうるものではない。この「お伽話」のような金花の「奇跡」物語を芥川はただ「嘲る意図」や「批評」するためにのみ書いたとは考えられないからである。目の前の霧を見抜いて、その深い所に潜んだものを探してみよう。

作品の主人公金花は南京の一人の私娼であり、キリスト教の信者である。

卓の上には置きランプがうす暗い光を放つてゐた。その光は部屋の中を明るくすると云ふよりも、寧ろ一層陰鬱な効果を与へるのに力があつた。壁紙の剥げかかつた部屋の隅には、毛布のはみ出した藤の寝台が、埃臭さうな帷を垂らしてゐた。それから卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。が、その外は何処を見ても、装飾らしい家具の類なぞは何一つ見当たらなかつた。⁽³⁾

貧しい家計を助けるために、金花は夜々暗い部屋で客を迎えている。しかし、不幸にも、彼女は悪性の楊梅瘡を病む体になった。この病気を他の人に移さないように、彼女は自分が餓え死にをしても、「御客と一つ寝台に寝ないやうに、心

がけねばなるまい」と決心した。そうして、金花と父親との暮らしは一層苦しくなっていた。金花の小屋の壁に、小さな銅製の十字架がつつましやかに懸かっていた。金花はこの十字架の前に跪いて、受難の耶穌を仰ぎ見ながら「天国にいらつしやる基督様。どうか私を御守り下さいまし」という祈りを捧げた。そして、「少女の眼はこの耶穌を見る毎に、長い睫毛の後の寂しい色が、一瞬間どこかへ見えなくなつて、その代わりに無邪気な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた」⁽⁴⁾。

そんなある日、一人の不思議な外国人がやって来た。金花はこの人が自分を救いに来た基督であると堅く信じて、彼と一夜を共にした。夢の中で、この見慣れない外国人の頭の上に、「丁度三日月のやうな光の環、一尺ばかりの空に懸かかつてゐた」。そして、この円光を頂いた南京の基督は金花に「無限な愛を含んだ微笑を洩ら」していた。そして、あくる日の朝、彼女の体に奇跡が起こった——悪性を極めた梅毒瘡が完全になくなった。

金花は本当に救われたのか。晴れ晴れと顔を輝かせた彼女の将来には、何が待っているのだろうか。その結末を芥川は読者に次のように提示している。

若い日本人旅行者は一人でこう考えた。「おれはその外国人を知つてゐる。あいつは日本人と亜米利加人との混血児だ。……男振りに似合わない、人の悪るさうな人間だった。あいつがその後悪性な梅毒から、とうとう発狂してしまつたのは、事によるとこの女の病気が伝染したのかも知れない」⁽⁵⁾。

作品の最後に日本の旅行家と金花の間にこういう対話がある。

『……だからお前は、その後一度も煩はないかい。』

『ええ、一度も。』金花は西瓜の種を齧りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした。⁽⁶⁾

芥川龍之介はここで広い想像の空間を読者に与えた。しかし、そのためにかえって、この結末は誤解されることが多い。実際、『南京の基督』に関して「少々作者の遊びも葉が効き過ぎる」、「不真面目」だと南部修太郎は月評で評している⁽⁷⁾。これに対して、芥川は南部修太郎への書簡の中で、「金花の梅毒が治る事は今日の科学では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第二期から第三期へ進む間に消滅するつまり間歇的に平人同様となるのだ」と書いてゐる⁽⁸⁾。三好行雄は、この梅毒の完治をめぐって書いた南部への書簡を重視してこう述べている。

「金花の盲いている Odious truth は、彼女の信じるイエスが無頼の徒であると

いう＜事実＞に尽きるのではない。病いが＜根治＞ではなく、潜伏期による見せかけの治癒にすぎぬとしたら、事實は、金花の夢想する＜奇跡＞自体がどこにも起こっていないという事実より以上に、もっと無惨である。金花の目に見えぬところで、病毒はひそかに肉体を蝕んでいるわけで、彼女はそれを、より悪化した病症の再発とともに、いやおうなく知らされるはずである。」従って、日本人旅行者の「おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであろうか。それとも黙って永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだろうか……」という自問自体が、実は空しい。「奇跡を信じたことの徒勞に醒める日は、かならず来る。彼女が＜永久に＞夢を見つづけることは、所詮不可能なのである。金花はやがて、イエスに裏切られた *Odious truth* を、自己の肉体を証明として発見するはずであり、そのとき、病んでなおイエスの像を見る＜無邪気な希望の光＞は、確実に消えるだろう。無頼漢にイエスを見る＜信念＞が強ければ強いほど、彼女の内面に口をあける空洞は大きく、ふかい。＜信仰＞は＜幸福＞とともに瓦解するはずであった⁽⁹⁾」。

金花の病いが根治ではなく、潜伏期による見せ掛けの治癒にすぎない。彼女の「信仰」もそのうち瓦解するであろう。残酷であるが、芥川は小説の余白で、金花の「現実の生」も「仮構の生」も崩壊させた。しかし、芥川が言おうとするのはこれだけではない。

もう一度文章の題目を見てみよう。『南京の基督』。「南京」は中国の一つの古い町で、「基督」は基督教の「主」である。中国は東洋儒教文明の発祥地であるが、基督教は西洋の代表的な宗教で、西洋で最も多くの信者を有している。「南京の基督」というこのユニークな組み合わせは一体何を意味しているのであろうか。

もし悪性の「楊梅瘡」を病む体になった金花を西洋に遅れているアジア、いや、もっと率直に言えば、日本の例えと捉えたら、あの見慣れない外国人を多くの日本人が憧れている「西洋文明」と見倣うことができるのではないだろうか。明治維新以後、日本は西洋文明を目まぐるしく輸入し模倣しはじめた。そして、急速な発展を目の前にして、人々はますます西洋文明を自分たちの救世主として堅く信じるようになった。その結果、西洋を非常に理想化して考えずにはいられなくなったと言える。西洋人の風俗、西洋人の習慣が徐々に日本人にとって文明の象徴として魅力を持ち、それを真似することが文明人の資格と見なされるようになった。当時の世相を反映する二葉亭四迷の『浮雲』の中にこのような描写がある。

髭に続いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物づくめには仏蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしとい

ふ。是れより降つては、背皺よると枕詞の付く「スコッチ」の背広にゴリゴリするほどの牛の皮毛靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く亀甲洋袴、いづれも釣るしんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デモ持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか覚めんと済した顔色で、火をくれた木頭と反身ツてお帰り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より続いて出てお出でなさるは……老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日本服でも勤められるお手軽な身の上、さりととはまたお気の毒な⁽¹⁰⁾。

当時お役人で和服を着ていられるのはお手軽な身分であるというほど、洋服を着ている人間が和装の人間より、無条件で優越するということがよく分る。このような日本人像は、まさにあの見知らぬ外国人が自分を救う神様であると信じている無邪気な金花とよく似ていると言えよう。

悪い病気を病む体になった金花は陰鬱な部屋に座っている。これは西洋の侵略に悩まされて出口のない日本の例えとして考えられる。突然、「泥酔した通行者」のように、見慣れぬ外国人が彼女の部屋を訪れた。彼は「索寞とした部屋の空気が、明るくなるかと思ふ程、男らしい活力に溢れ」た人であった。最初の「稍無気味な感じ」はだんだんなくなって、金花はこの見慣れぬ外国人に好意を持ち始めた。

そして、更に、彼女はこの未知の外国人の顔が「十字架に彫られた、受難の基督の顔」の「生き写し」であることを発見した。恍惚の間に、「唯燃えるやうな恋愛の歓喜が、始めて知った恋愛の歓喜が、激しく彼女の胸もとへ、突き上げて来」た。陰鬱な現実の中で、みずから作り出した仮構の神話に、金花はひたむきに走りこんでいったのである。

神話はまだまだ続く。朝になって、金花の体に「奇跡」が起こった。

金花はこの瞬間、彼女の体に起こった奇跡が、一夜の中に後方もなく、悪性を極めた梅毒瘡を癒した事に気づいたのであった。……彼女は思わず襯衣の儘、転ぶやうに寝台を這ひ下りると、冷たい敷き石の上に跪いて、再生の主と言葉を交はした、美しいマグダラのやうに、熱心な祈祷を捧げ出した。⁽¹¹⁾

この熱心に祈祷している金花の中に、ひたむきに西洋文明を信じている日本国民の姿が見られる。人々は最初、強いられた開国にやや抵抗を覚えたが、だんだん西洋文明の「よさ」を知り、凄まじい勢いで模倣し始めた。しかし模倣しているのは本当の近代文明なのか、ただの偽物なのか、そしてこの文明の「よさ」は

果たして自分に合うかどうか、国民たちはこれらの問題について考える暇がない、というより、元々考える気がなかったのだ。ただ新しい物の導入によって、目覚ましい「発展」をなしとげたという事実があるために、人々はより頑に西洋文明を救世主として信じるようになる一方である。

芥川は冷静に世の中を見ている。金花の小さな小屋には、日本の旅行家が再び現れて、金花の信じるキリストが George Murry という無頼の混血児であること、彼が悪性の梅毒を病んでついに発狂したことなどを告げる。金花の「信仰」が「仮構」であり、「夢」でしかなかった。この美しい「仮構の生」が忽ち読者の前に消えてしまった。では、病いが癒えたという「現実の生」はどうなるのであろうか。前に述べたように、芥川は南部修太郎にあてた書簡の中で読者のこの最後の希望をも完全に瓦解させた。残酷な結末は日本の将来を暗示している。芥川はこれを通じて、国民に警鐘を鳴らしているのだ。

勿論芥川も西洋の文明に強く惹かれている。しかし、彼は日本における西洋文明の移入方法とその結果に深い疑念を抱いている。「西洋文明」は本当に日本を救うことができるのであろうか。また、今移入しているものが本当の「西洋文明の骨髄」なのか、それとも、ただの偽物でしかないのか。これらのことを疑わずにただひたすら憧れて、導入することの危険性を示唆している。

東アジア文明と西洋文明とは深いところで、根本的に異なっている。今の功利的な表層の模倣が終われば、人々はこの違いから出てくる了解の不可能性という壁に直面しなければならなくなる。だとすれば、今の繁栄も本当の繁栄ではなく、ただ梅毒潜伏期の見せかけにすぎないのかもしれない。西洋を救世主とする信念が強ければ強いほど、目覚めた時の心の傷口は大きく、深い。目に見えない残酷なものが将来の何処かに潜んでいる。芥川は『南京の基督』を通して婉曲にこの不安を語っている。

実は芥川のこのような不安は突然降って湧いたものではない。彼は、大正七年（1918）に出版された『開化の良人』の中ですでに開化期の日本人のこうした思想状況を諷刺したことがある。『南京の基督』では隠喩を用いているものの、明らかにこの近代観がより鮮明になった。大正十年（1921）、芥川は新聞社の派遣で中国へ赴いたことがある。当時、中国はちょうど列強割拠の状態だったので、美しい東方古国の面影はもうどこにも見当たらなかった。この「場違い西洋」の前に芥川は「僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗悪なもの⁽¹²⁾が嫌ひなのだ。」と嘆きながら、同じ近代化に直面している日本のことを思い浮かべた。

蝙蝠は日本でも江戸時代には、気味が悪いと云ふよりも、意気な物だと思

はれたらしい。蝙蝠安の刺青の如きは、確にその証拠である。しかし西洋の影響は、何時の間にか塩酸のやうに、地金の江戸を腐らせてしまった。して見れば今後二十年もすると、『蝙蝠も出て来て浜の夕涼み』の唄には、ボオドレエルの感化があるなぞと、述べ立てる批評家が出るかも知れない。⁽¹³⁾

芥川は中国で自分の近代観を一層はっきりさせた。しかし、彼は問題を提示してはいるが、解決方法は彼自身も見つけることはできなかった。彼が自殺する時の「将来に対するぼんやりした不安」の中には、これも含まれているのではなかろうか。

-
- (1) 笹淵友一『芥川龍之介のキリスト教思想』〔『明治大正文学の分析』(明治書院、昭和四十五年)〕、863ページ〔(初出)『解釈と鑑賞』二十三卷十一号 昭和三十三年八月〕
 - (2) 駒尺喜美『南京の基督』〔『芥川龍之助作品研究』(八木書店、昭和四十四年五月)〕、110ページ
 - (3) 芥川龍之介『南京の基督』〔『芥川龍之介全集』第二卷(筑摩書房、昭和四十六年三月～昭和四十六年十一月)〕、234—243ページ
 - (4) 前掲書、235ページ
 - (5) 前掲書、242ページ
 - (6) 前掲書、243ページ
 - (7) 南部修太郎『最近の創作を読む 六』(東京日日新聞、大正九年七月十一日)
 - (8) 芥川龍之介『南部修太郎宛書簡』(九年七月十七日)〔『芥川龍之介全集』第七卷(筑摩書房、昭和四十六年三月～昭和四十六年十一月)〕、276ページ
 - (9) 三好行雄『地底に潜むもの—「南京の基督」前後』〔『芥川龍之介論』(筑摩書房、昭和五十一年九月)〕、225ページ
 - (10) 二葉亭四迷『浮雲』〔『二葉亭四迷全集』第一卷(筑摩書房、昭和五十九年十一月)〕、7ページ〔(初出)『浮雲』金港堂、明治二十年六月〕
 - (11) 芥川龍之介『南京の基督』〔『芥川龍之介全集』第二卷(筑摩書房、昭和四十六年三月～昭和四十六年十一月)〕、242ページ
 - (12) 芥川龍之介『江南游記』〔『芥川龍之介全集』第六卷(筑摩書房、昭和四十六年三月～昭和四十六年十一月)〕、61ページ〔(初出)『江南游記』大阪毎日新聞、大正十一年一月～二月〕
 - (13) 前掲書、61ページ